

**学校法人足利工業大学  
足利短期大学  
機関別評価結果**

**平成 20 年 3 月 19 日**

**財団法人短期大学基準協会**

## 足利短期大学の概要

設置者	学校法人 足利工業大学
理事長名	岡平 悟朗
学長名	清水 敦彦
A L O	高倉 秋子
開設年月日	昭和 5 4 年 4 月 1 日
所在地	栃木県足利市本城 3 丁目 2 1 2 0 番地

## 設置学科および入学定員(募集停止を除く)

学科	専攻	入学定員
幼児教育科		100
看護科		50
	合計	150

## 専攻科および入学定員(募集停止を除く)

専攻科	専攻	入学定員
専攻科	福祉専攻	35
	合計	35

## 通信教育および入学定員(募集停止を除く)

なし

## 機関別評価結果

足利短期大学は、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていることから、平成20年3月19日付で適格と認める。

## 機関別評価結果の事由

### 1. 総評

平成18年6月26日付で当該短期大学からの申請を受け、本協会は第三者評価を行ったところであるが、評価の結果、当該短期大学は、自らの掲げる教育理念の実現および教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていると判断した。

上記の判断に至った事由は、おおよそ次の通りである。

当該短期大学は、昭和54年に開学した短期大学としては比較的新しい大学であり、幼児教育科入学定員100名・看護科同50名・専攻科福祉専攻同35名の小規模で、地方都市に立地する短期大学である。しかしながら、当該学校法人は十分な実績と伝統を有しており、地域からの信頼・期待が大きい。それは、キャンパスのすぐ隣に「足利赤十字病院」が立地し、互いの協力関係が築かれていることでも充分にうかがえる。各学科は、資格目的学科として地域のニーズや要望を受けて設けられたものであり、かつ、地域福祉・医療への貢献は大きいと判断する。

建学の精神・教育理念は大乗仏教の教えを根本とし、それに基づき具体化された各学科の教育目的・教育目標では現代社会が求める教育のかたちを的確に表現している。また、それらをどのように学生に伝え、身につけさせるかについても相当の腐心をしている。

地域に生きる短期大学として、学生のボランティア活動、教員による社会貢献活動に積極的に取り組んでいる。地域に愛される短期大学として、より一層の活動の充実が期待される。

小規模でかつ地方にある短期大学の多くが抱えている課題は、当該短期大学にも存在する。その中で、学生を第一義に教育内容や教育環境に配慮していることが充分にうかがえる。特に各学科の専門教室や学生ホールの整備・充実は高く評価できる。その一方で、図書館スペースの拡大やリファレンスの充実などは今後の課題である。

全体を通じ、当該短期大学は様々な取り組みを実施あるいは実施予定であるが、学校法人として、短期大学の人的配置を含め自らの特色を失わず、自己の強みを選択し、そこに特化・集中することも検討してもらいたい。

## 2. 三つの意見

### (1) 特に優れた試みと評価できる事項

評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

- 仏教的情操豊かな人材の育成をめざす建学の精神・教育理念は、学生が主体的に参加する年4回の仏教行事や一般教育・専門教育の授業科目に具現化されている。

評価領域Ⅱ 教育の内容

- 地域の幼稚園や保育所、行政機関と連携した「足利幼児教育研究会」の活動は活発である。

評価領域Ⅴ 学生支援

- 進路父母相談会や保護者懇談会を定期的に行き、進路支援を積極的に推進している。

評価領域Ⅶ 社会的活動

- 思春期の高校生を対象とした学生によるピアカウンセリング活動を行っている。
- 五つの担当組織をもつ「地域交流委員会」を設置し、積極的に地域貢献や外部への情報発信に努めている。

評価領域Ⅹ 改革・改善

- 自己点検・評価の体制が整備され、教育理念や専門分野に近い短期大学との相互評価を実施している。

### (2) 向上・充実のための課題

評価領域Ⅱ 教育の内容

- 組織的、継続的な授業改善を図るためにファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動を推進することが望まれる。
- 授業シラバスの記載内容に不統一がみられ、とくに「評価内容・方法」の成績評価基準は具体的に学生に明示されることが望まれる。

評価領域Ⅷ 管理運営

- 委員会数が多く、複数の教員が委員の兼務をしている状況がみられるので、委員会組織の見直しを含めた工夫・改善が望まれる。

### (3) 早急に改善を要すると判断される事項

なし

### 3. 領域別評価結果

	評価領域	評価結果
評価領域Ⅰ	建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標	合
評価領域Ⅱ	教育の内容	合
評価領域Ⅲ	教育の実施体制	合
評価領域Ⅳ	教育目標の達成度と教育の効果	合
評価領域Ⅴ	学生支援	合
評価領域Ⅵ	研究	合
評価領域Ⅶ	社会的活動	合
評価領域Ⅷ	管理運営	合
評価領域Ⅸ	財務	合
評価領域Ⅹ	改革・改善	合

#### 評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

建学の精神は、聖徳太子の十七条憲法の「和を以て貴しと為す」を掲げ、その精神に基づいた仏教的情操豊かな人材育成に努力している。その教育目的・教育目標には、現代社会が求める幼児教育、保育、看護、介護に関わる社会人・職業人に必要な資質を的確に表現している。また、学長をはじめとする教職員一丸となった学生の教育・指導体制、さらに学生と仏教行事委員会で実施される年4回の仏教行事開催は注目できる。

今後は、「建学の精神」と各学科の「教育目的」の関連性を、より具体的で学生に理解しやすいものとするのが望まれる。

#### 評価領域Ⅱ 教育の内容

建学の精神に基づく仏教的情操を有する専門職業人の育成を目指し、各学科とも教養教育と専門教育の融合に相当の腐心をしている。幼児教育科一般教育科目「仏教学」、専門科目「仏教保育論」の開講がその一例である。各学科の教育課程は、科目選択の自由度には制約はあるものの、資格免許に関わる養成施設に必要な専門科目のほか、基礎教育科目が体系的に編成されている。カリキュラム改善にも意欲的に取り組んでいる。

教育方法の改善に関しては、学生による授業評価が継続的に行われているが、教員間の意見交換、教員研修会などの全学的立場からのFD活動は今後の課題である。

「足利幼児教育研究会」の継続的かつ積極的な活動は、短期大学の教育・研究・地域貢献のモデルとなりうるものである。

### 評価領域Ⅲ 教育の実施体制

教員組織は、短期大学設置基準の規定を充たしており、その年齢構成もおおむねバランスが取れている。特に、看護科においては、教員の大半が看護師有資格者であることから充実した陣容となっている。

教育環境は、短期大学の資格目的学科として十分な水準を維持していると判断される。しかしながら、図書館は狭小な感は拭えず、今後の蔵書数の増加には、現状では充分に対処できないと思われる。学生サービス、地域開放の観点から、図書館スペースの拡充や他機関との連携、リファレンスの充実が望まれる。

### 評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

各学科の学生のほとんどが所期の資格・免許を取得して卒業し、専門職への就職率も相当に高いという結果から、担当教員の授業への熱意・教育目標達成のための取組みが十分に展開されていると判断される。

卒業生との接触による教育効果の確認（アウトカム評価）は、緒についたばかりであり、今後の進展に期待したい。

単位認定状況については、教員によって多少の差がみられた。単位認定についての教員間の共通理解やシラバスの「評価内容・方法」の見直しなどに組織的に取り組む必要がある。

### 評価領域Ⅴ 学生支援

クラス顧問を中心に教職員が一体となり、就学支援、学習支援、進路支援、生活支援が組織的に行われていると判断される。特に幼児教育科、看護科では、学生を小グループに分け、専任教員による少人数指導の体制がとられている。また、学生相談室や進路相談室を設け、相談員を配置し、各種相談に応じている。

独自の奨学金制度などを設け、経済的な支援、学業精励者に対する支援にも配慮している。

### 評価領域Ⅵ 研究

教員の研究活動は活発とはいえないが、小規模な地方短期大学では各種委員会活動、学生指導、担当授業、地域貢献などに忙殺されるのが常であり、致し方ないと思われる。そのような現状で「足利幼児教育研究会」の活動は特筆に値する。短期大学における研究活動の一つのモデルともなるものである。一層の充実を期待したい。

研究活動活性化の条件整備では、研究費などの支給条件は短期大学の水準を上回るものと思われる。研究室などの研究環境は十分なスペースと備品が確保されており、教育研究に対する学校法人・大学側の配慮が感じられる。教員には研究環境に甘んじることなく、さらに一層研究活動に励んでもらいたい。

## 評価領域Ⅶ 社会的活動

短期大学全体あるいは教員・学生の社会的活動は、各種の取組みを通じ積極的に展開されている。特に学生による社会的活動（Students to Students Project、ピアカウンセリング活動）は特筆できるものである。

国際交流については、足利市の姉妹都市であるスプリングフィールド市のコミュニティー・カレッジとの継続的な相互交流が行われている。また、国際学会における研究発表もみられる。

## 評価領域Ⅷ 管理運営

学校法人、教授会、事務組織は相互に補完・協力連携し、教育活動の円滑化・経営管理の効率化に努めていると判断される。教授会の運営は、教授会の開催に先立ち運営会議を開催するなど、学長のリーダーシップの下に運営され、おおむね良好である。

事務組織の業務分担は、規程により細部まで定められており、明確となっている。しかしながら、事務職員の数は少なく、学生・教員へのサービス強化のための業務の簡素化、効率化、システム化が今後の課題である。

スタッフ・ディベロップメント（SD）活動は外部研修参加にとどまっている。今後は、当該学校法人や短期大学による内部研修実施も検討してもらいたい。

## 評価領域Ⅸ 財務

財務運営は適切に履行されている。財務体質については、十分な余裕資金を保有しているが、単年度の収支均衡に向けた改善努力は今後の課題である。

## 評価領域Ⅹ 改革・改善

「第三者評価委員会」や「自己点検・評価委員会」が中心となり点検・評価活動を行う実施体制、改革・改善の仕組みは確立していると判断される。その体制・仕組みによる教職員一丸となった Plan-Do-See サイクルの構築にも努力している。

今回の自己点検・評価報告書は、従来取組んできた自己点検・評価活動や相互評価活動において課題とされた部分の改革・改善結果を表したものとなっている。